

岐阜県美術館  
研究紀要  
08

研究ノート

書簡からたどる

川合玉堂と故郷・岐阜の画廊を巡る交流

鳥羽都子

## 書簡からたどる

## 川合玉堂と故郷・岐阜の画廊を巡る交流

岐阜県美術館学芸員 鳥羽 都子

## 一 はじめに

本稿では、川合玉堂（一八七三—一九五七）が岐阜市内の画廊主（栖鶴堂主人）に宛てた書簡を軸に、画家と郷里の人々の地域性豊かな交流をたどる。

日本画家からの多数の書簡の存在は、美術館への玉堂作品の寄贈の際に画廊主から知らされた。そのうち、玉堂、前田青邨（一八八五—一九七七）、山口蓬春（一八九三—一九七一）らの個性豊かな書簡は所蔵品展「ぎふの日本画 おいしかったよ すばらしい鮎だ 書簡にみる画家と岐阜の人々の交流」（二〇二四）にて紹介し反響を得た。この度、玉堂の書簡の寄贈に伴い、体系的な整理調査を行った（表1）。

書簡が証す通り、当該画廊は日本画家たちと深く親交したが、とりわけ玉堂と親交が深い。岐阜育ちの玉堂は折々に東京に贈られる郷土の味覚を楽しみ、画廊主の逝去の報に接しては、電報・書簡・作品を相次ぎ送って悼んだ。

人柄のじむ言葉遣いや、思いを込めてしたためた文字には玉堂の息遣いが宿っている。

る。端正かつ平明な率意の運筆からは、日常的に筆を使いこなす画家の名手ぶりが立ち上がる。

画商の成立については、東京や京・大阪の動向が美術制度の関連から重点的に研究されている。地方もその影響下にあったように錯覚されがちであるが、各地域の特性によって背景や過程を異にするのではないか。本稿では、社会状況も重ね合わせつつ、同画廊に伝わる玉堂の小品四点と書簡二六通を読解する。

## 二 栖鶴堂（後の長江洞）について

長良川の水運を中心に発展した岐阜は、大正初期の中心市街地が今よりも川に近かった。初代は、社寺が多い地域ながら商業・交易等で活気もあった街道沿いの小熊町にて画商を創めた。栖鶴堂という屋号は、竹内栖鳳（一八六四—一九四二）の許可を得て雅号の一字「栖」を用いたものである。栖鳳の弟子・橋本関雪（一八八三—一九四五）揮毫による屋号の扁額は今も画廊に掲げられている。

玉堂が幼少期を過ごした米屋町とは徒歩

一〇分ほどで、玉堂の妻の実家・大洞家（常盤町）もほど近い。画廊主の人柄や厚情に加え、玉堂夫妻が気兼ねなく岐阜弁で話せる相手としても気の置けない交遊が深まっていたと思われる。画廊は戦後いったん休止されたが、現在同地に再興されている。

歴代の画廊主は次のとおりである。

## ①初代 若山喜一郎

（一八八七—一九五〇、戸籍では喜二）

玉堂や青邨に鮎や柿を届けるなど多くの日本画家と交遊する。

大正初頭、創業。「同業者は、全国でも十人程しかいなかった」と喜一郎は語っていたという。三越呉服店（百貨店）が初めて現存作家の日本画を扱ったのが明治四一（一九〇八）年であり、当時「新画」といった現存作家の日本画専門の美術商は確かに新しい職業といえる。

喜一郎の弟良蔵は栖鶴堂支店として表具屋（下竹町）を営み、二家で協力し日本画を扱う仕事をすすめた。この分離経営方式は、表具屋が掛軸の表装や修理の傍ら「新画」の売

買を行う当時において、明確に「美術商」スタイルを志していた傍証といえる。

喜一郎夫妻には子がなく、良蔵夫妻の長男・朗を養子として迎える。

### ②二代目 若山朗（ほがら）（一九二二—二〇一八）

喜一郎の養子。朗の出征に際し玉堂が無事を祈って《千里往還》を描いた（資料4）。帰還後は丸物百貨店（後の近鉄百貨店）の美術部に勤務。戦後まもなく逝去した初代の交遊を引き継ぎ、奥村土牛（一八八九—一九九〇）や小野竹喬（一八八九—一九七九）らとも親交を結ぶ。

三七年間務めた百貨店の定年を機に、長江洞と号し画廊を再興。屋号はかねて約束していた奥田元宋（一九二二—二〇〇三）にもらった。元宋は玉堂の弟子・児玉希望（一八九八—一九七二）に師事しており、玉堂の孫弟子にあたる。

### ③三代目 若山晴夫（一九五二—）

朗の長男。玉堂が命名（資料28）。朗夫妻の三人の子らの名は、全員玉堂にゆかりがあり、長女芳子は玉堂の本名芳三郎の一字を貰い、次男和夫も玉堂の命名である。

晴夫は大学卒業後、七年間東京で画商修行をし、昭和五七年（一九八二）、朗の百貨店退職に合わせ、朗と画廊を再興。代々の審美眼をもって、現代日本画家を見出し長いスパンで紹介している。

## 三 資料・作品紹介

玉堂の書簡には本文・封筒とも月日のみで、年は書かれない。幼い頃に切手収集を趣味とした晴夫が切手を封筒から切りとってしまつて、消印が確認できない書簡も多い。本稿では、玉堂や若山家が戦禍を避けた仮寓の住所や内容から書かれた年を推測し（詳細は表1）、古い順に紹介する。□は判読困難な文字を示す。

### 資料1

#### 富有柿のお礼状

若山喜一郎宛

昭和16（1941）年10月19日

はしりの富有柿を贈られたことのお礼状。まだ風味が十分でなく、来月が食べごろだろうと伝えており、気の置けない間柄が窺える。

拝復 愈々清

安奉存候 此度は

富有柿の走り

御贈被下 難有御

好意いつもながら

御禮申上候 いまだ

十分の風味とは

申がたく来月

にも相成候は、真盛

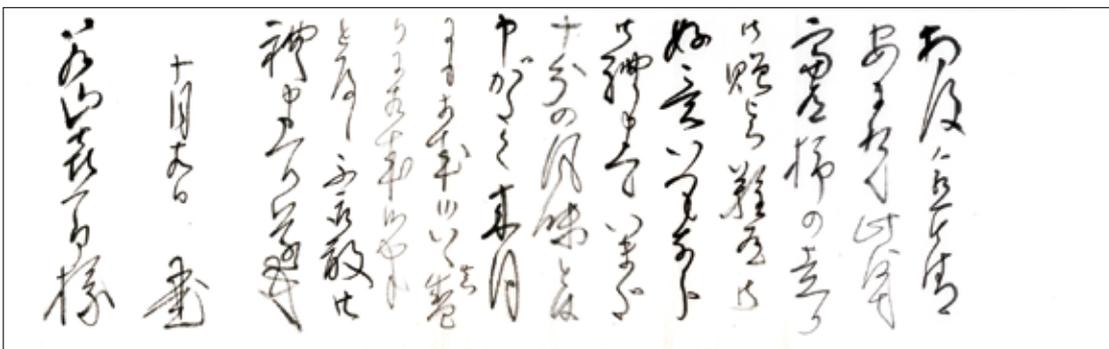
りに相成候事

と存し不取敢御

禮申上候 草々頓首

十月十九日 玉堂

若山喜一郎様



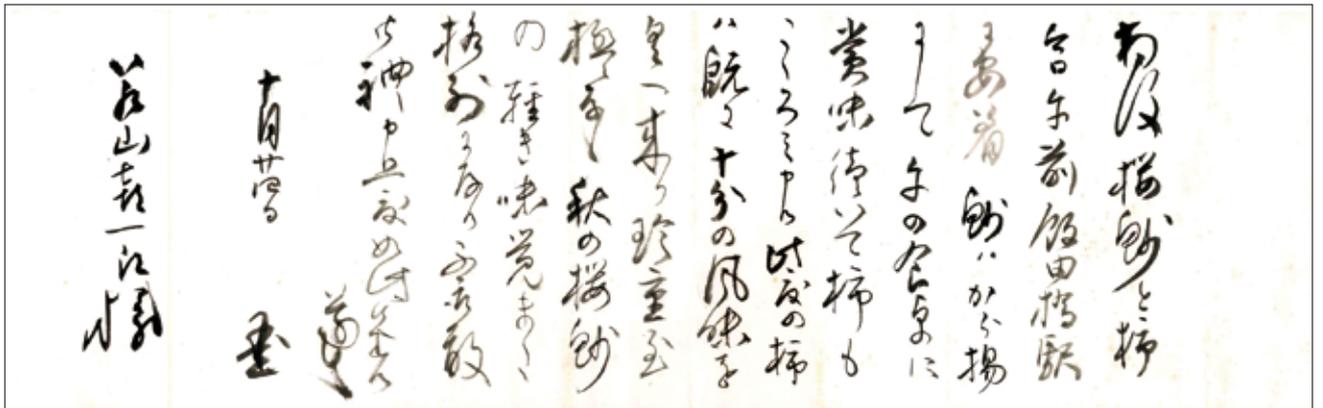
十分な風味の柿のお礼状

若山喜一郎宛

昭和16(1941)年10月24日

桜鯊<sup>はせ</sup>と柿の礼状。鯊はから揚げにし、この度の柿は十分な風味があったことを伝えてい。資料1の五日後、喜一郎が熟柿を見繕って急ぎ送ったものの返礼か。ほほえましい関係性である。

拝復 桜鯊と柿  
今日午前飯田橋駅  
に安着 鯊は から揚  
にして 午の食卓に  
賞味 続いて柿も  
こころみ申候 此度の柿  
は既に十分の風味を  
具え来り珍重至  
極に存候 秋の桜鯊  
の軽き味覚また  
格別に存候 不取敢  
御禮申上度如此御坐候 草々頓首  
十月廿四日 玉堂  
若山喜一郎様



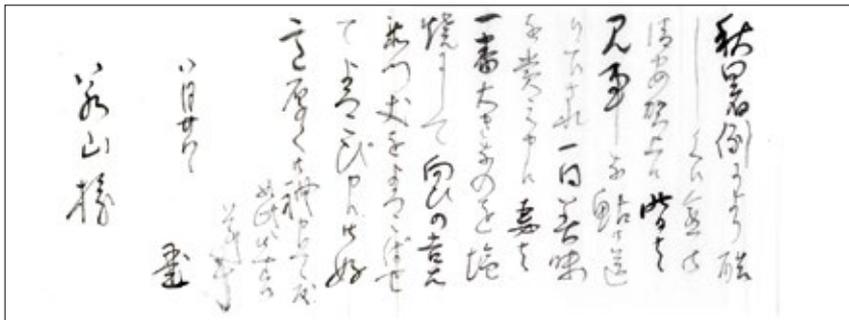
鮎のお礼状

若山喜一郎宛

昭和18(1943)年以前8月28日

一番大きな鮎を塩焼にし、向かいに住む歌舞伎役者・初代中村吉右衛門(一八八六-一九五四)を喜ばせ、妻が喜んだと知らせる。吉右衛門と玉堂は共に俳句が趣味で意気投合し親しく付き合った。

秋暑 例により酷  
しく候 愈々御  
清安賀上候 昨日は  
見事な鮎御送  
り下され一日美味  
を賞え申候 妻は  
一番大きなのを塩  
焼にして向ひの吉右  
衛門丈をよろこばせ  
て よろこび申候 御好  
意厚く御礼申上度  
如此御坐候 草々頓首  
八月廿八日 玉堂  
若山様



《千里往還》

若山朗宛（箱裏に為書き）

昭和18（1943）年2月

当時二一歳の朗の出征に際し贈られた。虎は「千里を往って還る」と、戦時に武運長久の象徴として好まれた画題。だが、玉堂が描いたのは、勇猛な虎ではなく、振り返って後ろを見つめ、引き返しそうな程にためらう前脚の虎。若山家の心情に寄り添う、親しい間柄だからこそその表現である。



川鱒の礼状

若山喜一郎宛

昭和18（1943）年5月9日

送られた川鱒の風味が格外と絶賛する。追伸に、昨今（戦時で）輸送が難しいのにと配慮を謝する。

拝啓 時下愈御清

安賀上候 扱本日は

川鱒 御送被下 難

有 時間通り 安着

流石に風味も格別

にて御好意を感じ

謝仕候 右 不取敢御

禮申上度如此御坐候 草々頓首

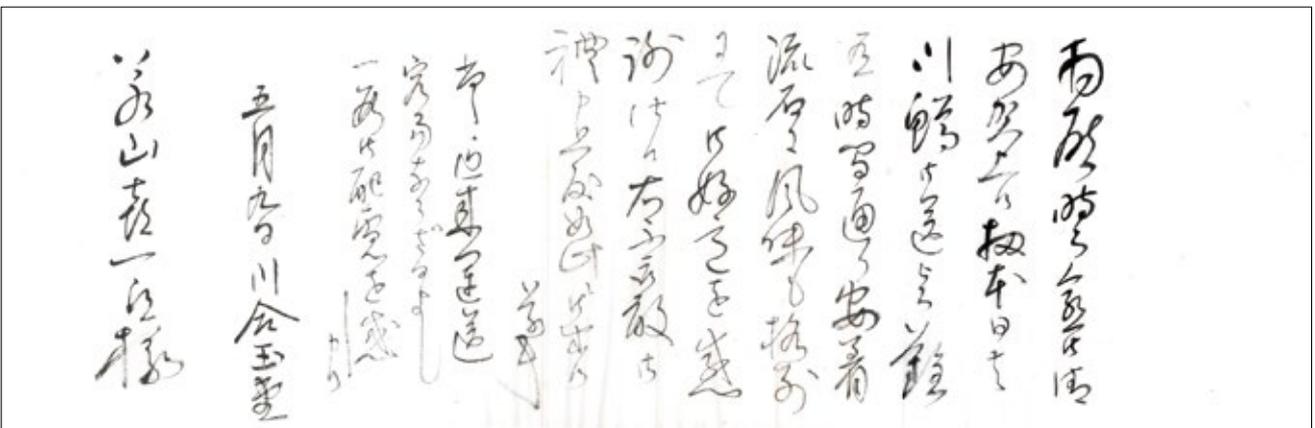
尚々 近来運送

容易ならざるよし

一段御配慮を感じ申候

五月九日 川合玉堂

若山喜一郎様



箱入り娘のお礼状

若山喜一郎宛

昭和17-19 (1942-44) 年1月30日

真黒な箱入娘無事

着いたし手塩にかけ

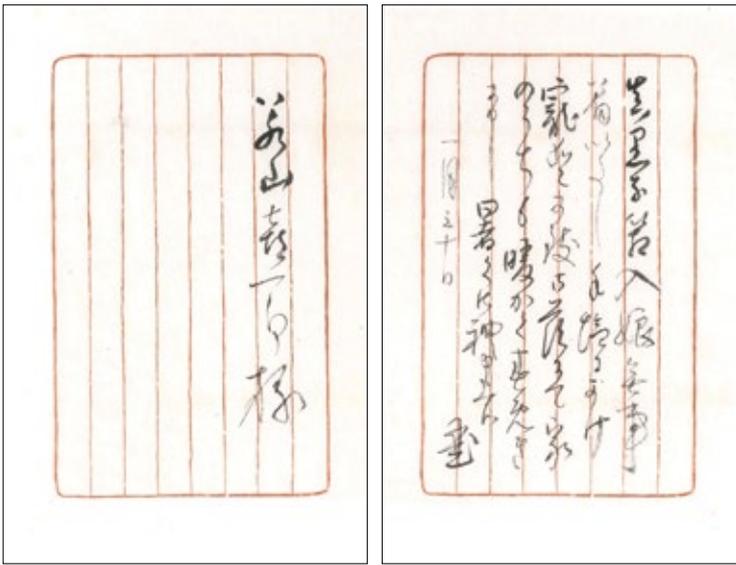
寵愛可致御蔭にて家

のうちも暖かく春めき

□し 暑く御禮申上候 玉堂

一月三十日

若山喜一郎様



墨絵の軸物のお礼状

若山喜一郎宛

昭和19 (1944) 年以前2月14日

軸物箱入安着 一幅ツ、新聞

紙に包ミテ 御注意之程 感し入申候

軸物ハ全部スミ絵にて傑作

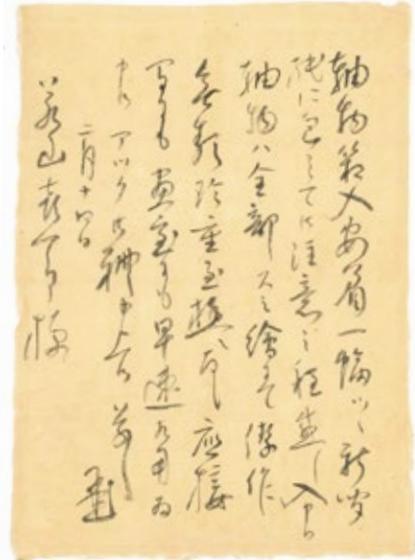
無類珍重至極ニても候 応接

間にも 画室にも早速相用ゐ

申候 アツク御禮申上候 草々 玉堂

二月十四日

若山喜一郎様



珍肴のお礼状

若山喜一郎宛

昭和19 (1944) 以前5月9日

「澆刺」とした珍肴のお礼。昭和一六年、小学校同級生の杉山半次郎宛の書簡に、「御心を籠められたる鮎(略)長良川産の澆刺たるもの」と形容していることから、本書簡も新鮮な鮎の礼状であろう。ことのほか長良川の鮎を好んだ玉堂には、杉山半次郎、紙問屋の勅使河原直治、若山家から鮎が贈られたことが書簡から分かる。5月初旬、稚鮎は川を遡上する時期だがほとんど市場に出回らない。玉堂は「舌鼓を打ち鳴らし」と報告。

拝啓 昨日御心にかけて

られ頂戴物 難有

存候 昨日ハ 珍肴御

送下され無事着

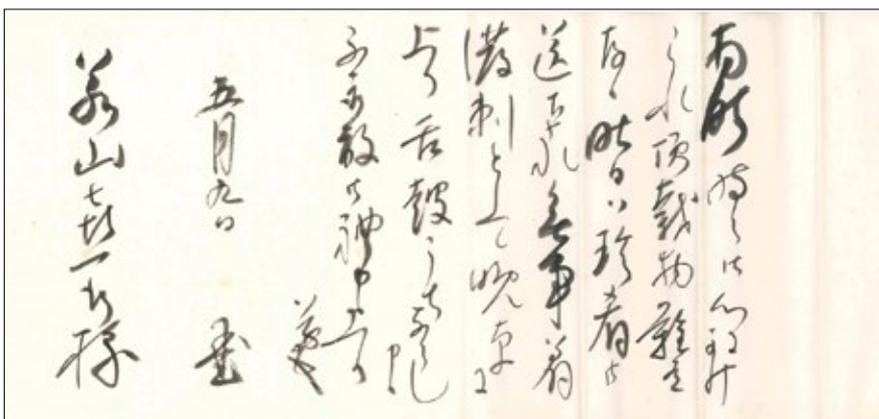
澆刺として 晩卓に

上り 舌鼓うちならし申候

不取敢御禮申上候 草々頓首

五月九日 玉堂

若山喜一郎様



資料9  
鮎のお礼状

若山喜一郎宛

昭和19（1944）年以前7月28日

電報で着荷日時を知らせ、駅へ受けとりに行っていたこと、運輸の不自由さ、吉右衛門へのおすそ分けが恒例であったことなどが分かり興味深い。

拝啓 愈御清適賀上候 昨日の

電報に引続き今朝新橋駅に於

て鮎受取来り候處 澁刺

として 生けるものゝ如く 殊に

今年ハ 運輸不便のため長

良川の鮎も諦め居候ことゝて

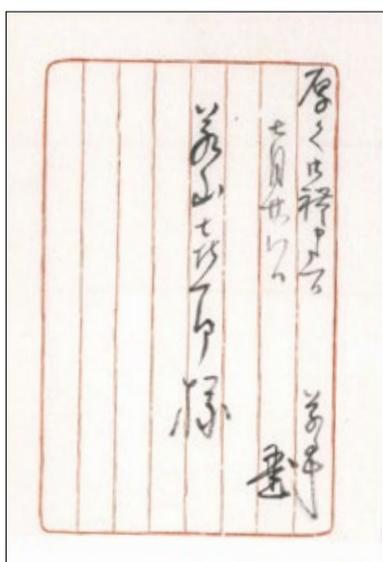
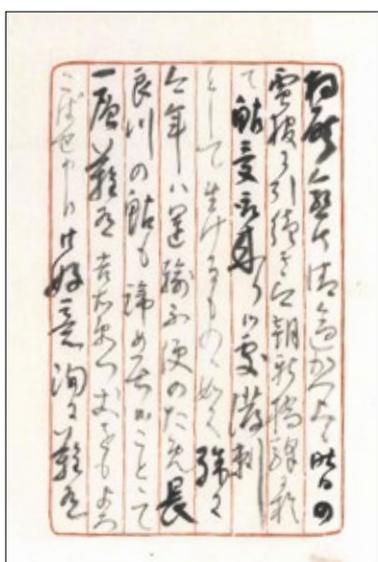
一層難有 吉右衛門丈をもよろ

こばせ申候 御好意詢に難有

厚く御禮申上候 草々頓首

七月廿八日 玉堂

若山喜一郎様



資料10

岐阜疎開の誘いへのお礼と御岳の様子

若山喜一郎宛

昭和19（1944）年以降8月4日

わざわざ奥多摩を訪ねてくれたこと、頂戴物に対するお礼を述べながら、奥多摩御嶽には知人も多いと疎開の様子を伝える。玉堂は上京間もない頃から奥多摩に写生に通い詰めていた。

喜一郎から岐阜への疎開を誘われたのであろう、岐阜であればさらに親しみもあるけれども「故郷の懐に逃れるのは最後の手段」と辞している。玉堂の覚悟が窺える一文である。一方で、濃尾地震で実家を失っている玉堂にとって、故郷の情味が胸に沁みる申し出だつたに違いない。

拝復 如仰炎暑酷しく候處愈御

多祥賀上候 扱一日御訪ね下され候よし生

憎不在にて御氣之毒致し候 またして

重寶な頂戴物いたし候よし 御心

にかけられ詢に難有 厚く御禮申上候

當御嶽は年々参り候山にて近づき

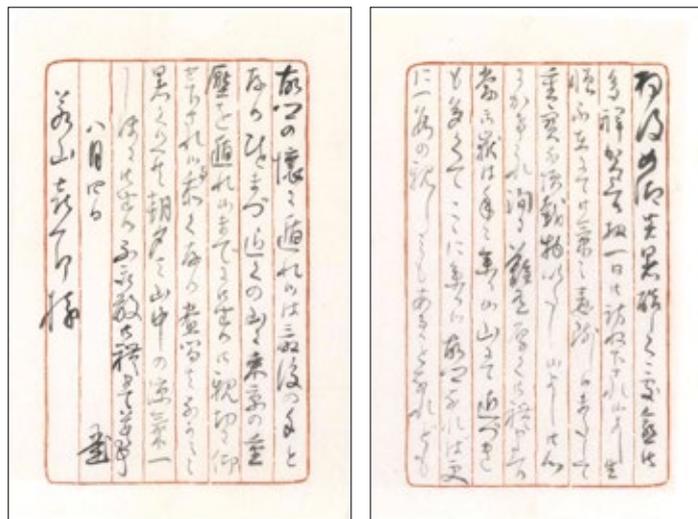
も多くて こゝに参り候 故郷なれば更

に一段の親しみもあることなれども

故郷の懐に通れ候は最後の手と

存候 ひとまづ 近くの山に東京の重

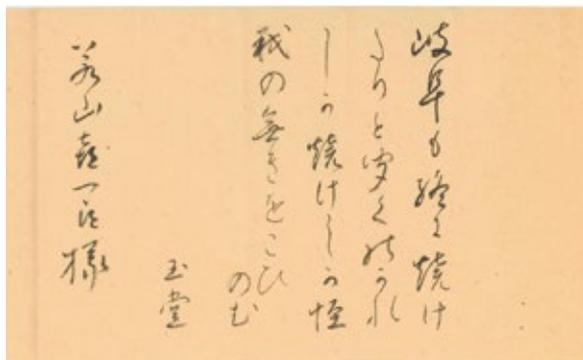
歴を連れ候までに御坐候 御親切に仰  
 せ下され候事 忝く存候 昼間はなかゝ、  
 暑く候へ共 朝夕は山中の涼気一  
 しほに御坐候 不取敢御禮まで草々頓首  
 八月四日 玉堂  
 若山喜一郎様



日夜から十日未明にかけての激しい空襲で市  
 街地の七割が焼け野原となり、若山家も焼失  
 した。他の玉堂の手紙は行草体の候文で認め  
 られるが、心情を乗せやすいのであろうか、  
 本書は玉堂が作歌で用いていた仮名書風で認  
 められる。「逃れたか焼けたか」と急く語調  
 で筆を走らせるが、全体は優しく包み込む趣  
 がある。

封筒の余白には鉛筆で薄く住所らしきもの  
 が書かれ朱で囲ってある。親類宅に避難した  
 被災者に手紙が渡るまでの困難が窺える。

岐阜も終に焼け  
 たりと聞く のかれ  
 しか 焼けしか 怪  
 我の無きをこひ のむ 玉堂  
 若山喜一郎様



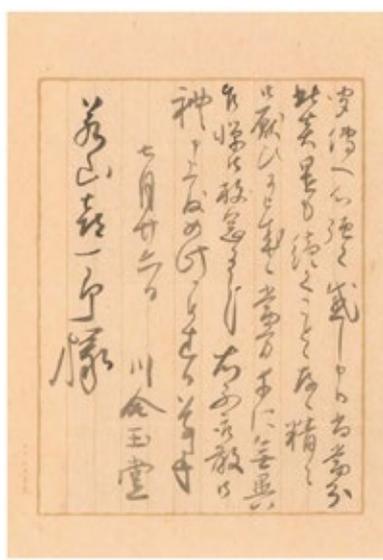
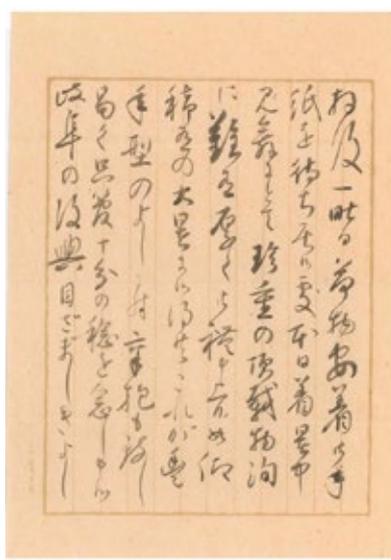
資料12  
**暑中見舞い**  
 若山喜一郎宛  
 昭和21(1946)年頃7月26日  
 荷物と手紙が届いたお礼と暑中見舞い。岐  
 阜の復興を喜ぶ。

拝復 一昨日荷物安着御手  
 紙を待ち居候處 本日着 暑中  
 見舞にとて珍重の頂戴物詢  
 に難有 厚く御禮申上候如仰  
 稀有の大暑に候得共 これが□  
 年型のよしに付辛抱も致し  
 易く只管十分の稔を念し申候  
 岐阜の復興目ざましきよし  
 聞傳へ心強く感じ申候 尚當分  
 此炎暑も続くことゝ存じ精々  
 御厭ひに被成候 當方等に無異  
 乍憚御放念にて候 右不取敢御  
 禮申上度如此御坐候 草々頓首  
 七月廿六日 川合玉堂  
 若山喜一郎様

資料11  
**空襲の無事を祈る手紙**

若山喜一郎宛  
 昭和20(1945)年7月

岐阜空襲を案じる短信。終戦直前の七月九



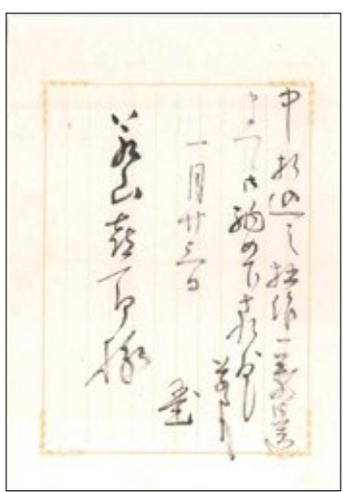
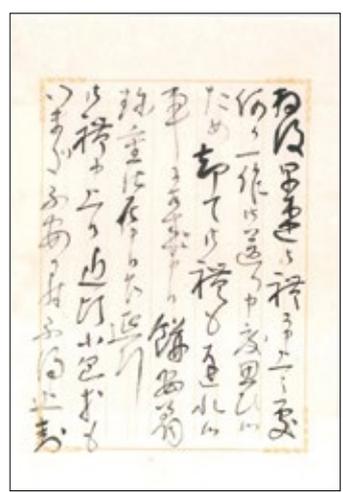
資料13  
餅のお礼状

若山喜一郎宛

昭和21-25 (1946-50) 年1月23日

お礼の作をと思つてかえつて遅れたと述べる。戦後間もない頃で紛失も多かったのだろう、「小包もいまだ不安」として、お礼の作を同封したと記す。本書簡のみ書留なのは作品在中ゆえであった。

拝復 早速御禮可申上し處  
何か一作御送り申度思ひ候  
ため 却て御禮も遅れ候  
事に相成申候 餅安着  
珍重仕居申候乍延引  
御禮申上候 近頃小包等も  
いまだ不安に付不得止封  
中払込し拙作一葉御送  
申上候 御納め下され度候 草々頓首  
一月廿三日 玉堂  
若山喜一郎様



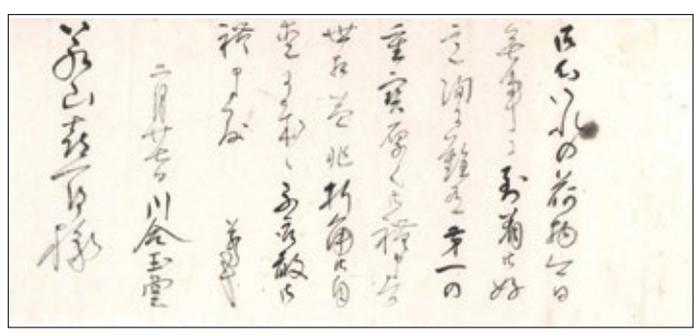
資料14  
お礼状

若山喜一郎宛

昭和21-23 (1946-48) 年2月27日

発信者の玉堂、受取者の喜一郎双方とも、  
避難先の住所。「第一の重宝」とのことから、  
鮎や柿ではなく生活必需品を、牛込の家を  
失った玉堂に送ったのであろう。喜一郎自身  
も焼け出され親類の軒を借りている苦境での  
心遣いが篤い。

御心いれの荷物今日  
無事に到着御好  
意詢に難有第一の  
重寶厚く御禮申上候  
世相益兆折角御自  
愛に被成候 不取敢御  
禮申上度 草々頓首  
二月廿七日 川合玉堂  
若山喜一郎様



お礼状

若山喜一郎宛

昭和21-23 (1946-48) 年1月21日

青梅線の沢井駅（御嶽駅の一つ立川寄り）の駅長が玉堂に荷物を届けてくれたと記す。晴夫は「戦後の食糧不足の頃は、取り締まりを避けるために軸箱に米を隠して送ったと父に聞いてます。岐阜は東京よりまだ物資があったでしょうから」と語る。各務原特産の絵絹を届けることもあったという。

拝復 厳寒の折柄愈御健

勝賀上候 扱此度ハ御心入の品々

壹箱御送被下忝 沢井駅長

より届けくれ候 荷物安全

にて誠に難有 いずれも珍重

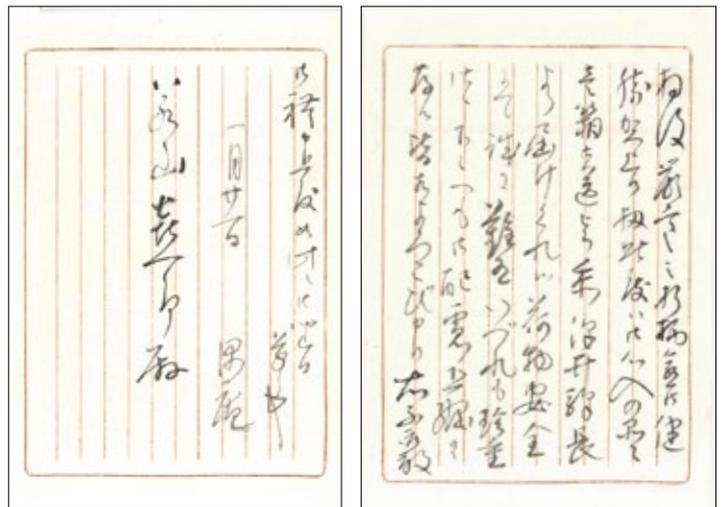
仕候 下々へも御配慮恐縮に

存候 皆相よろこび申候 右不取敢

御禮申上度如此ニ御坐候 草々頓首

一月廿一日 偶庵

若山喜一郎殿

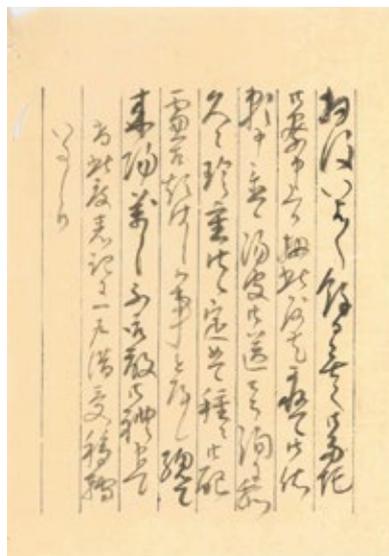
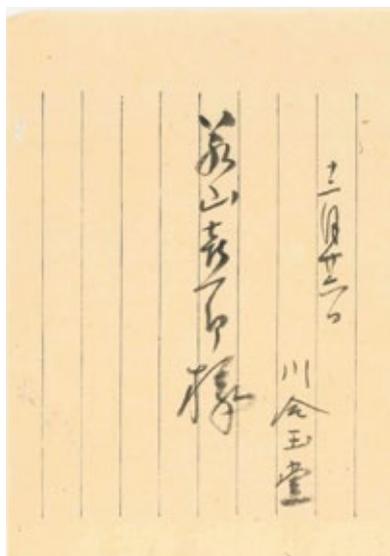


湯葉のお礼と転居のお知らせ

若山喜一郎宛

昭和20 (1945) 年12月26日

文中の「湯皮」は湯葉のこと。油皮、豆腐皮とも書く。水がきれいな岐阜は、豆腐や湯葉が殊に美味い。玉堂は、かねて依頼していた湯葉が届いたと手配を思いつつ礼を述べる。取り寄せるほど好んだ湯葉はおそらく玉堂実家近くの老舗のもの。玉堂が病に臥した折には、若山家は上京して届けている（資料30）。



拝復 いよく餘日無く御多忙  
御察申上候 扱此度はかねて御依頼申置候 湯皮御送被下詢に悉く候 珍重仕候 定めて種々御配慮相煩はし候事と存し候 総て来□萬々不取敢御禮申上候  
尚此度表記に一戸借受移転  
いたし候  
十二月廿六日 川合玉堂  
若山喜一郎様

病気のお見舞い

若山喜一郎宛

昭和23-25 (1948-50) 年2月7日

喜一郎が正月に寝付いたと聞くが長引きすぎで、油断せず養生をとの親身の便りである。

文中の「白木氏」は、画廊から徒歩数分の七間町で大正時代から開業している白木眼科のこと。「玉堂を取り巻く趣味人の一人で、画廊のお客さんでした。移転したが白木眼科は今もありますよ」と晴夫は玉堂を支えた旦那衆の消息を語る。「堀江氏」は、明治一三(一八八〇)年に大垣市で表具業を創めて玉堂の作品も多く手掛け、屋号も玉堂の揮毫による「堀江文錦堂」のこと。現在は、画廊・文錦堂(岐阜市)として五代目が営む。

一通の消息の中に明治から令和へと受け継がれる地域文化の支え手が登場しており、貴重な地域史といえよう。資料18にも堀江氏に喜一郎の病のことを聞いたと記される。

拝復 正月以来

発熱御病床と傳

承、たいしたことでは

無いらしいとの事

なりしが、ちと長び

き過るように感

せられる、流感かも知

れぬ これ存外油断のならぬもの、よし、

四五日前白木氏来

訪の際御尋ねしても、

いつころ不明、暫く

また病床中との「(こと

多分流感ならむ

と察せられるのみ、心

がら油断無く養

生第一、至急御全快

を祈ります、追て堀

江氏上京のよし 容

体も分り可申何分

御加養第一に存候 草々

二月七日 偶庵

若山喜一郎様

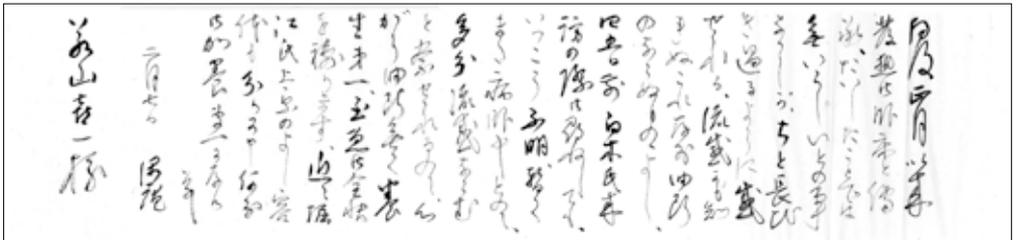
資料18

病気のお見舞い

若山喜一郎宛

昭和23-24 (1948-49) 4年月23日

堀江氏(前述)の催しにて、玉堂の二男・修二が喜一郎の病を聞き、見舞いを伝えてい



る。若山家は玉堂に心配をかけまいと病状を知らせていないことや、玉堂が岐阜のもう一軒の画商・表具店とも親交が深いがさまが窺える。

拝復 此度堀江氏の御催にて

修二罷出候處 貴殿折柄

御病気の由承り御案じ

申候 専ら御療養一日も早

く御全快の程 禱申候 不順

の気候も漸く春暖に相成

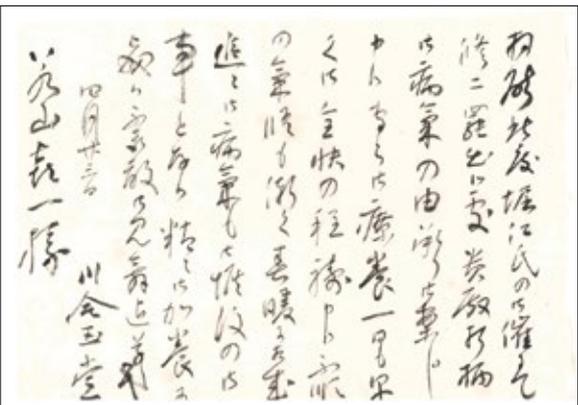
追々御病気も御恢復の御

事と存候 精々御加養可

被成候 不取敢御見舞迄 草々頓首

四月廿三日 川合玉堂

若山喜一郎様



## 体調の心配と卓一対のお礼状

若山喜一郎宛

昭和23-24 (1948-49) 6月23日

贈られた卓一対が見事な出来で重宝していることを感謝しながら、喜一郎の体調を引き続き案じている。

「卓一対」について、晴夫は「空襲で家財一式を失った玉堂に高山の春慶塗の家具でも贈ったのでは」と推測する。

梅霖 兎角麿

陶敷候處其後

御容体如何追々

御恢復の御事と

存候 扱御心配下され

候卓一対見事

に出来 先日無事

着 日々重寶致

居申候 御好意千萬

難有 御禮申上候

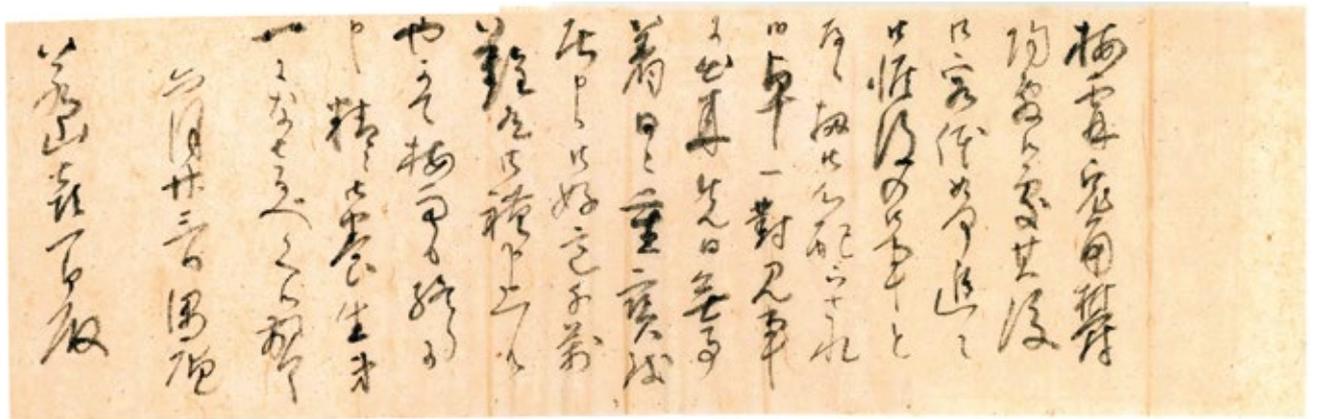
やがて梅雨も終り可

申精々御養生第

一になさるべく候 頓首

六月廿三日 偶庵

若山喜一郎殿



## 《刈田鶴》

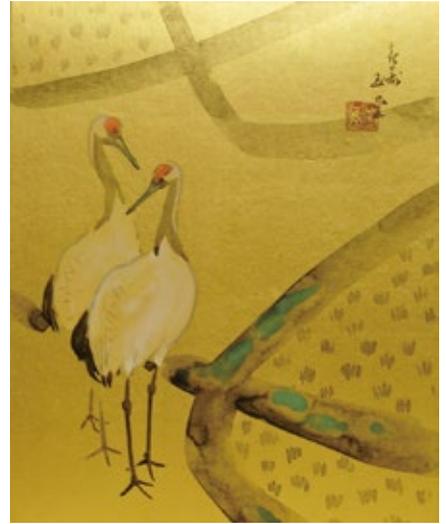
若山喜一郎宛

昭和24 (1949) 年11月24日

玉堂は喜寿(七七歳)を祝って鶴の絵を親しい人々に贈った。

主要年譜では「昭和二五年一月 喜寿を祝って配る」とされているが、本作と共に保管されていた添状に「昭和廿四年」と印刷されていることから、実は二四年であったことが判明。また裏付けとして、喜一郎は昭和二五年二月に亡くなっており、以降の書状は朗宛であるが、添状には喜一郎の名が明記されているため、喜一郎存命中の二四年の染筆であることが明らか。二年にわたり描いた可能性も残されているが、数え年で七七歳となる昭和二四年に祝ったものが、満年齢での出来事として年譜は作成されたか。

稲株が残る晩秋の田に、長寿の象徴・鶴が舞い降りた情景を描き、金地に墨と緑青で表した田の畦道のかたちが「七七」となる趣向。色紙ごとにさまざまな鶴の姿を描いたが、本作では、夫婦鶴が寄り添う。



資料21

お悔み(電報)

ワカヤマキ一宛

昭和25(1950)年2月10日

ツウセキニタエズ ザンネン トリアエズ  
オクヤミモウス カワイギヨクドウ

資料23

《楊柳観音》

喜一郎の訃報を受け、玉堂と次男・修二は  
急ぎ打電。続いて翌日、観音菩薩図を手紙に  
同封して弔意を届けた。資料21〜24の四点か  
ら、喜一郎の不届を痛惜する心情が伝わる。  
若山家では、法事の折に飾り愛蔵する。



資料24

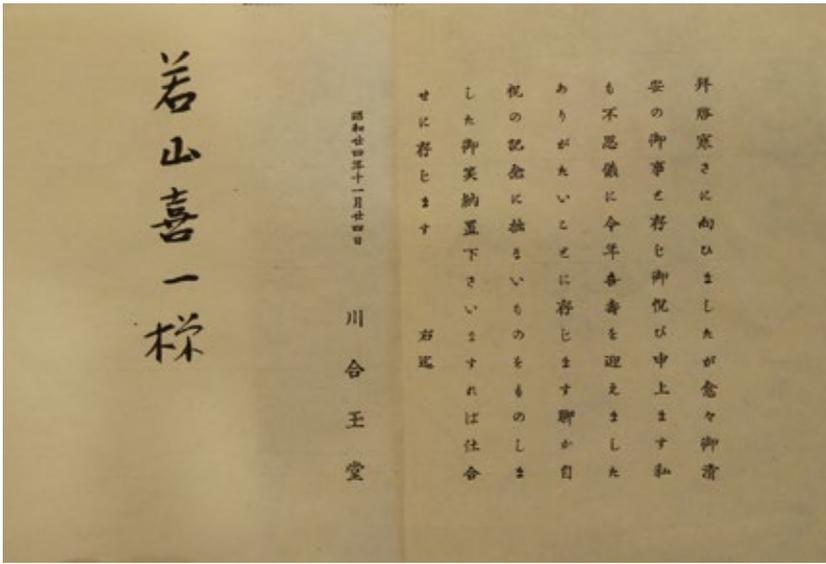
お悔み

若山朗宛

昭和25(1950)年2月11日

喜一郎が亡くなったことについての弔文。  
観音図を送っている。

出だしは鎮痛に重く、中ほどでは感情が発  
露し「悲嘆」「人世無常」の文字が大きくなり、  
末の「白衣観音」では渴筆の細い書きぶりが  
清らか。肥瘦や行間の変化に富み、深い悲し  
みがにじみ出る率意の筆である。



資料22

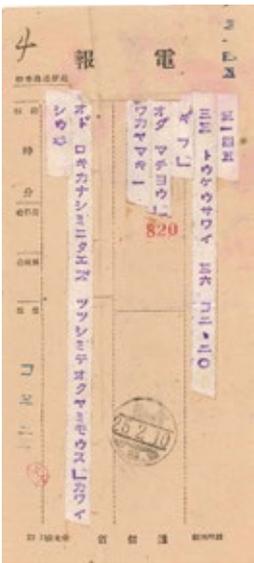
お悔み(電報)

ワカヤマキ一宛

昭和25(1950)年2月10日

\*修二(玉堂次男)より

オドロキカナシミニタエズ ツツシミテオク  
ヤミモウス カワイシウジ



拝啓 此度の御病

氣御養生の甲斐

無く遂に御逝去相

成候事 遺憾限り

無く候 御一門御愁傷

之程御察し申上候 かゝる

御大患とも不存此程

堀江氏より容易なら

ぬ御重態と承り心痛

罷在候 折柄電報に

接し悲嘆措く能

はず候 人世無常最

早天命と諦むるの

外無之 嘸之痛惜

に堪へす 謹て 弔意

を表し度 即

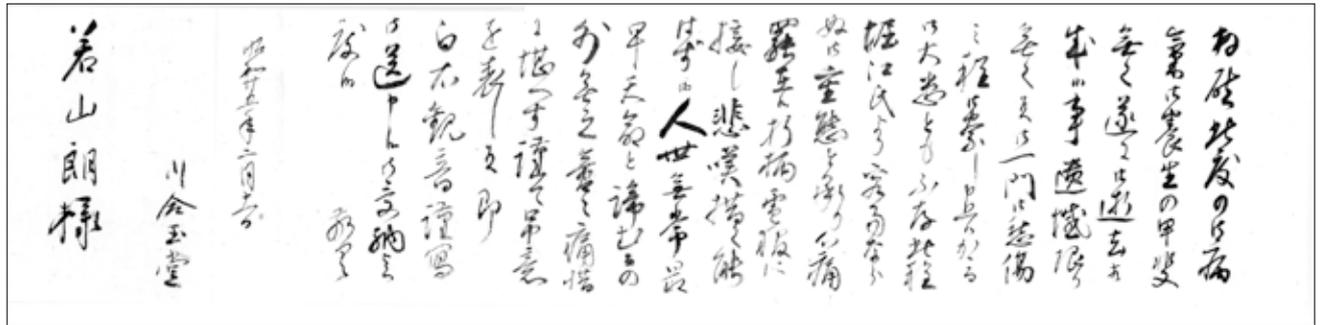
白衣観音 謹寫

御送申候御受納被下

度候 敬具

若山朗様

昭和廿五年二月十一日 川合玉堂



資料25

座椅子と脇息のお礼状

若山朗様

昭和25(1950)以降2月14日

座椅子と脇息が贈られたことに対するお礼を述べ、炬燵の両側に置いて夫婦で楽しむ様子を伝える。

拝啓餘寒厳しく

候處愈御健勝賀上候

扱此度はわれ等老夫婦

の為に座椅子乃脇

息御送り被下恐縮に存じ

早速炬燵の両側に座

椅子を据へ向かひ合ひた

るところなかゝよろしく

まことにふさはしき珍重

のものを御送り下され

難有 日夜たのしまれ申候

脇息も同じく頗る重

寶いたし候 御好意厚く

御禮申上度いづれ御目にかゝり

萬々申述度存候

二月十四日 偶庵

草々頓首

若山朗様

川合玉堂

資料26

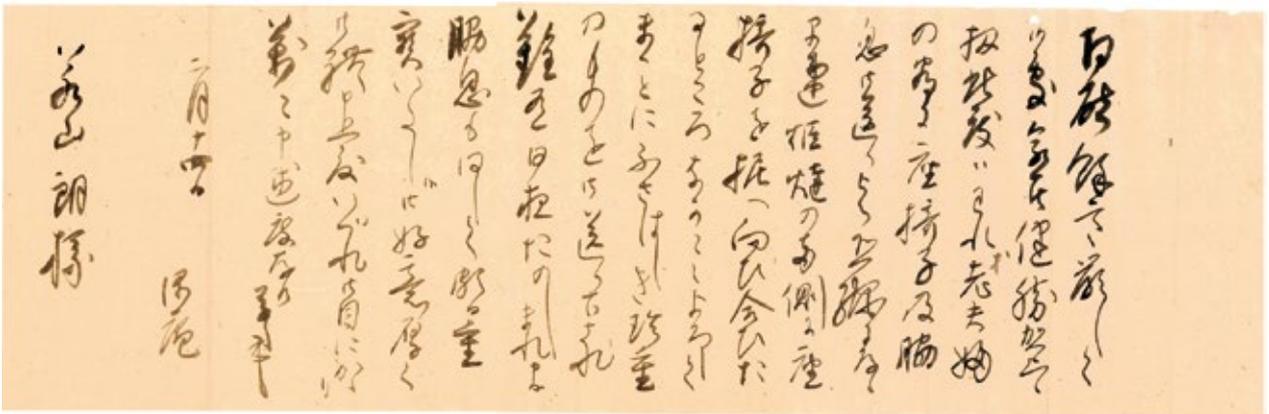
鮎のお礼状

若山宛

昭和25年(1950)以降 8月26日

大物で風味も格別な、見事な鮎を朗の妻が届けたことにお礼を述べている。手交のため封筒に住所はない。

朗の末の妹、九十二歳になる恵美は「良蔵一家と朗一家と分担して東京に住む画家たちに鮎を届けていた」と懐かしむ(図1)。晴夫は「新幹線が開通する以前のこと。氷が解けて水がこぼれるので、デッキで番をしたり、取られないよう洗面所に鎖でつないだり、苦勞して運んだものでした」と語る。



資料27

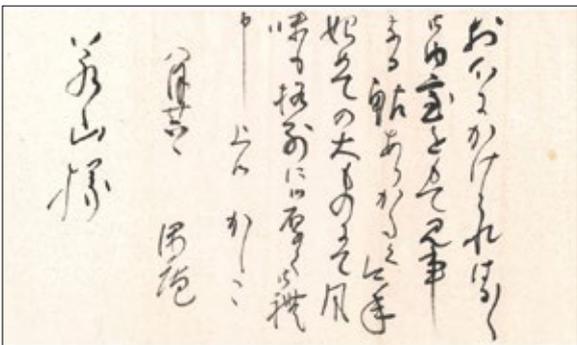
毛織のお礼状

若山朗宛

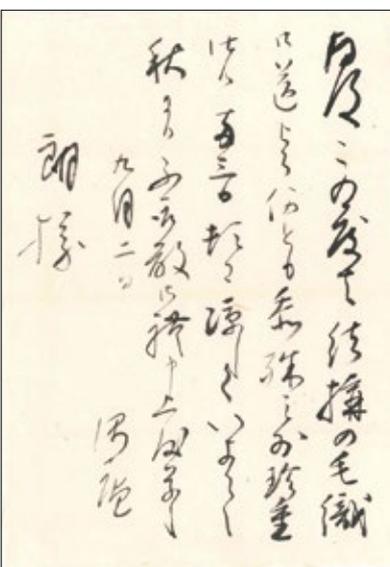
昭和26か28(1951か53)年9月2日

一宮(愛知県)の毛織物を贈ったのであろう。朝鮮戦争を機に昭和二五(一九五〇)年から繊維業界が好況で、ガチャンと織機を動かせば万単位で儲かるといわれたガチャマン景気の頃。画廊も一宮のお客さんが多かった。木曾川兩岸の一宮から岐阜あたりは繊維産業が盛んで、一体的な文化経済圏を成していた。一宮は玉堂の生地でもある。

拝復 この度は結構の毛織御送被下何とも忝殊之外珍重仕候 両三日頓に涼しくいよく秋に候 不取敢御禮申上度 草々  
九月二日 偶庵  
朗様



お心にかけてはるく御内室をもて見事なる鮎ありがたく今年始めての大ものにて風味も格別に候 厚く御禮申し上候 かしこ  
八月廿六日 偶庵  
若山様



命名書

若山朗宛

昭和27年(1952) 8月20日

喜一郎の没後二年半ほどして、朗の長男が誕生。喜一郎の孫にあたる。かねて命名の依頼を受けていた玉堂は、速達で命名書を送った。「喜ぶ(喜一郎)・朗らか(朗)・晴れる(晴夫)」と三世代が響きあい、長い交遊の証となっている。奉書に気品漂う書きぶり。

拝啓 弥々御佳適 待望通り

長男を挙げられ大慶至極ニ

存候 かねて命名御依頼に任

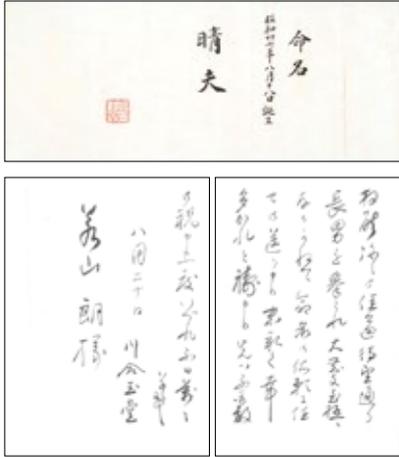
せ御送り申候 末永く幸

多かれと禱申候 先は不取敢

御祝申上度いづれ不日萬□ 草々頓首

八月二十日 川合玉堂

若山朗様



《飛躍》

昭和27(1952)年8月

後に三代目となる晴夫が誕生した際の祝いの作。立身出世の象徴とされる鯉が奔流を飛ぶ画題を墨と淡彩で描く。



湯葉のお礼状

若山朗宛

昭和28(1953)年12月17日

\*玉堂執事より

遠路お見舞いに来て、たくさんの湯葉をはじめ、弟子たちへの心遣いを贈られたことに對するお礼状。

「届けたのは『ゆば勇』(本町)のでしょう」と晴夫は確信をもつ。同店は慶應三年(一八六七)創業、現在も同地で営業をする老舗である。

拝復 先日は遠路態々御見舞

下さいまして まことに忝く存じて

おります、その折は玄関・台所の方

までお心に懸け下され恐れ入りました

この度は又御懇篤

なる御見舞状とともに 何よりの「ゆば」

沢山お送り下さいまして有難う御座

居ました 御芳志浅からず拝受

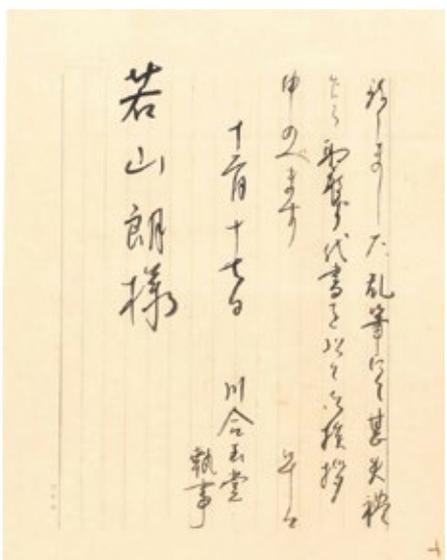
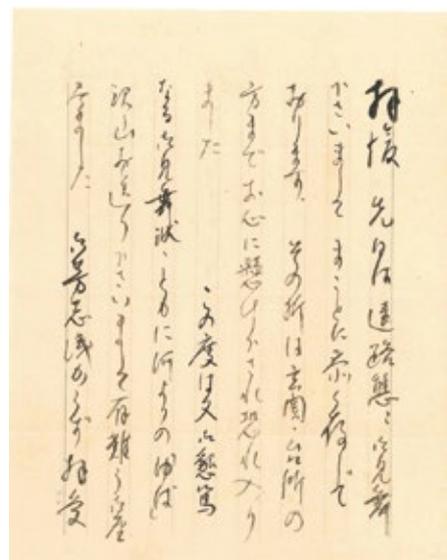
致しました 乱筆にて甚失禮

乍ら取敢ず代書を以って御挨拶

申のべます 草々

十二月十七日 川合玉堂執事

若山朗様



#### 四 おわりに

玉堂の書簡は、これまで明治から昭和一〇年頃までのものが調査されているが、本調査は、第二次世界大戦開戦の頃から戦後のものであり、既に画壇の重鎮となっていた玉堂と、郷里岐阜の人々との濃やかな交流を物語る一連の資料となる。

岐阜市街地が空襲に遭い、書簡の受取人の家が戦災で焼失した状況を考えると、よくぞ残っていたと思われる貴重な資料だ。

書簡を経時で辿ると、開戦後とはいえ、まだ歌舞伎役者の家に鮎をおすそ分けしていた生活から（資料3、9）、青梅に疎開した頃の心持ちが示され（資料10）、多摩で転々とする様子が書簡の住所で示される。戦後も輸送不便はたびたび言及され（資料12、15）、玉堂ほどの名声を得た人物でも物資不足にさらされている様子が分かる。

全体を通し、春夏は鮎、秋は柿、食糧事情の悪い折には餅、戦禍のあとは家具をと、岐阜から献身的と思えるほど物資を送っていたこともわかった。

何より、戦禍のなか、互いを思いあつていたことに心打たれる。濃尾地震で実家を失っている玉堂に、血のつながりのない画商・喜一郎が岐阜への疎開を勧め、玉堂は感謝しながらも「故郷は最後の手段」と画業第一に辞している。終戦直前には岐阜空襲の報を受け、

玉堂は即日逸る筆で「逃れしか焼けしか」と喜一郎の安否を気遣った便りを出している。

また、手紙に出てくる店や知人宅は、半径一キロメートルほどの範囲にあり、そのほとんどを現在も訪うことができる（図2）。濃やかな交流が育まれ、それを引き継ぐことのできる数十年変わらない街の環境が岐阜文化の核といえるのではないだろうか。

若山家では今も「玉堂は筆が早く、朝行く」と夕方には尺八の絵ができていた。画賛などは『子どもに何か買ってあげて』とお駄賃替わりにくれたものだった」と、語り継がれている。書簡に登場する「堀江氏」の子息の営む市内の画廊・文錦堂でも「玉堂の家のある東の方角には足を向けて寝てはいけない」と伝えられている。玉堂と故郷の画商一家がいかに真心をもって付き合ったかが分かるエピソードである。

京都発祥の丸物百貨店は岐阜空襲で被災し、占領軍向けの土産物などを扱った後は、繊維景気で沸いた商店街の中核として繁盛した。朗は、復員後は丸物百貨店の画廊で働き、若山家の営む画廊に中断の時期があることも時代と地域を物語り、画廊が三代にわたりにかに時代に合わせ変貌していったかも示される。

また、これまで玉堂年譜に昭和二五年とされていた喜寿自祝の色紙が、数え年で七七歳となる昭和二四年に描かれていることが明らか

かになった。

以上のように、心のこもった一通一通から、作品が生み出された背景や画家の生涯とともに、世相や地域性が読み取れる。俯瞰すれば、画家と信頼関係を築く画商が、日本画が繁華する地域を支える人的ネットワークの一員となっていたことも明らかである。本稿が地域の記憶を留める地域文化史の一記録として、文化継承に資することができれば幸いである。

(敬称略)



▶図1 玉堂宅を訪問時、多摩川で撮った。後列左右が朗夫妻、中央が朗妹・恵美、前列が朗長女・芳子と晴夫。昭和32年春ごろか



▶図2 1955年版大岐阜全図(岐阜市役所土木部編集 大衆書房発行 部分)に筆者加筆



	内容	形状・装丁	備考	所蔵
	はしりの富有柿を贈られた礼状。まだ風味が十分でなく、来月が食べごろだろうと伝えるもの。	巻紙、封筒	東郷平八郎の4銭切手は昭和12年発行。消印不鮮明だが年号に「6」が読み取れ昭和16年と推定。	岐阜県美術館
	桜鯊と柿が届いたことに対するお礼状。鯊はから揚げにし、柿は十分な風味があったことを伝えるもの。	巻紙、封筒	東郷平八郎の4銭切手は昭和12年発行。消印不鮮明だが年号に「6」が読み取れ昭和16年と推定。	岐阜県美術館
	一番大きな鮎を塩焼にして、向かいの吉右衛門丈をよろこばせたことを知らせている。	巻紙、封筒		岐阜県美術館
	若山朗の出征に際し、虎の絵を送ったもの。	元箱、軸（紙本墨画）	蓋裏に為書「昭和十八年二月為若山朗君 玉堂作（印）」	個人
	送られた川鱒の風味が格外的なもの絶賛し、感謝を伝えるもの。	巻紙、封筒		岐阜県美術館
	箱入り娘が無事に着いたことに対するお礼を伝えるもの。	便箋、封筒	消印判読できず。封書料金5銭の期間。	岐阜県美術館
	墨絵の軸を送られた玉堂がお礼を述べ、応接間や画室に用いることを伝えている。	折紙、封筒	消印・切手ないため牛込の住所から推定。	岐阜県美術館
	送られた珍肴がとてもおいしかったことを伝えるお礼状。	巻紙、封筒	消印・切手ないため牛込の住所から推定。	岐阜県美術館
	新鮮な鮎を送られたことに対するお礼状。	便箋、封筒	消印・切手ないため牛込の住所から推定。	岐阜県美術館
	頂戴物に対するお礼を述べながら、玉堂の青梅の生活の様子を伝えている。	便箋、封筒	消印・切手ないため御嶽の住所から推定。	岐阜県美術館
	岐阜が(空襲で)焼けたことを心配し、無事を祈るもの。	巻紙、封筒	消印・切手ないが7月9日に岐阜空襲があったことから推定。	岐阜県美術館
	荷物と手紙が届いたお礼と暑中見舞い。岐阜の復興を喜ぶ様子を記す。	便箋、封筒	消印・切手なし。「岐阜の復興目ざましき」=戦後の復興の頃とする。	岐阜県美術館
	餅のお礼に一作を制作して送ろうとしたため、お礼が遅くなってしまった、小包はまだまだ不安と伝えている。	便箋、封筒	書留。消印・切手なし。郵便が「いまだ」不安との記述から終戦直後一喜一郎没年までと推定。	岐阜県美術館
	御心いれの荷物が届いたことに対するお礼を伝えるもの。	巻紙、封筒	消印・切手なし。若山家が岐阜空襲後に久屋町で避難生活を送っていた期間から推定。	岐阜県美術館
	御心入の品々が一箱届いたことに対するお礼を伝えるもの。	便箋、封筒	消印・切手なし。若山家が岐阜空襲後に久屋町で避難生活を送っていた期間から推定。	岐阜県美術館
	かねて依頼の湯葉を送られたことに対する礼状と転居のお知らせ。	便箋、封筒	消印・切手なし。宛先は若山家が避難先であり、玉堂が御嶽に昭和20年12月転居直後と確定。	岐阜県美術館
	正月以来、病気が長引いていることを流感ではないかと心配している。	巻紙、封筒	消印・切手なし。若山家が小熊町に戻った昭和23年から喜一郎没年まで。	岐阜県美術館
	堀江氏の催しにて、玉堂の二男の修二が、喜一郎の病気を聞き、お見舞いを伝えている。	折紙、封筒	消印・切手なし。若山家が小熊町に戻った昭和23年から喜一郎没前年まで。	岐阜県美術館
	贈られた卓一対が見事な出来で重宝していることを感謝しながら、喜一郎の体調不良を心配している。	巻紙、封筒	消印・切手なし。御嶽転居及び若山家が小熊町に戻った後、喜一郎没前年まで。	岐阜県美術館
	玉堂の喜寿祝いとして、刈田鶴の図を描いた色紙を若山喜一郎に送ったもの。	元箱、色紙（紙本金地着色）	蓋表に「刈田鶴 喜寿自祝」。蓋裏に「御先生喜寿拝領色紙」の貼り紙。	個人
	喜一郎逝去に対するお悔やみを伝える電報。	紙		個人
	玉堂次男より、喜一郎逝去に対するお悔やみを伝える電報。	紙		個人
	喜一郎が亡くなった際に送った観音図。	軸（紙本墨画）	お悔み書簡と組。	個人
	喜一郎が亡くなったことについての弔文。観音図を送っている。	巻紙、封筒	消印・切手ないが喜一郎没年で確定。	個人
	座椅子と脇息が送られたことに対するお礼を述べ、炬燵の両側に置いて楽しむ様子を伝えている。	巻紙、封筒	消印・切手なし。代替わり後と推定。	岐阜県美術館
	大物で風味も格別な、見事な鮎を送られたことに対するお礼を述べている。	巻紙、封筒	鮎を直接届けた朗の妻に託した礼状。封筒表に「若山朗様」、裏に「偶庵」。	岐阜県美術館
	毛織のお礼を述べつつ、次第に涼しくなり秋が近づいていることを述べている。	折紙、封筒	切手なし。消印は昭和26または28年。	岐阜県美術館
	かねて命名を依頼されていた玉堂が長男の誕生を祝い、命名書を送ったもの。	折紙、封筒	速達。消印・切手ないが晴夫生年で確定。奉書に楷書、押印。	岐阜県美術館
	後に3代目となる晴夫が生まれた記念の作。たくましく成長することを祝う「鯉の滝登り」の画題。	軸		個人
	遠路わざわざお見舞いに来て、湯葉をたくさん送られたことに対するお礼状。	便箋、封筒	11月に玉堂が病を得たため執事が書いたもの。玉堂実家近くの老舗の湯葉を届けたか。	岐阜県美術館

表1

資料 No	宛先(受取人)	宛先住所(封書表)	発信住所(封筒裏)	資料名	和暦	西暦	月日	
1	若山喜一郎	岐阜市小熊町	東京牛込	富有柿のお礼状	昭和16	1941	10月19日	
2	若山喜一郎	岐阜市小熊町	東京牛込	十分な風味の柿のお礼状	昭和16	1941	10月24日	
3	若山喜一郎	岐阜市小熊町	東京牛込	鮎のお礼状	昭和18	1943	8月28日	
4	若山朗	—	—	千里往還	昭和18	1943	2月	
5	若山喜一郎	岐阜市小熊町	東京牛込	川鱒のお礼状	昭和18	1943	5月9日	
6	若山喜一郎	岐阜市小熊町	東京牛込	箱入り娘のお礼状	昭和17-19	1942-44	1月30日	
7	若山喜一郎	岐阜市小熊町	東京牛込	墨絵の軸物の礼状	昭和19以前	1944以前	2月14日	
8	若山喜一郎	岐阜市小熊町	東京牛込	珍肴のお礼状	昭和19以前	1944以前	5月9日	
9	若山喜一郎	岐阜市小熊町	東京牛込	鮎のお礼状	昭和19以前	1944以前	7月28日	
10	若山喜一郎	岐阜市小熊町	西多摩郡三田村御嶽	岐阜疎開の誘いへのお礼と御嶽の様子	昭和19以降	1944以降	8月4日	
11	若山喜一郎	岐阜市小熊町	西多摩郡古里村白丸	空襲の無事を祈る手紙	昭和20	1945	7月	
12	若山喜一郎	岐阜市久屋町 田中和支様方	西多摩郡三田村御嶽	暑中見舞い	昭和21頃	1946頃	7月26日	
13	若山喜一郎	岐阜市久屋町 田中邦支様方	西多摩郡三田村御嶽	餅のお礼状	昭和21-25	1946-1950	1月23日	
14	若山喜一郎	岐阜市久屋町 田中邦支様方	西多摩郡三田村御嶽	お礼状	昭和21-23	1946-1948	2月27日	
15	若山喜一郎	岐阜市久屋町 田中和支様方	西多摩郡三田村御嶽	お礼状	昭和21-23	1946-1948	1月21日	
16	若山喜一郎	岐阜市久屋町 田中邦支様方	西多摩郡三田村御嶽	湯葉のお礼と転居のお知らせ	昭和20	1945	12月26日	
17	若山喜一郎	岐阜市小熊町	西多摩郡三田村御嶽	病気のお見舞い	昭和23-25	1948-1950	2月7日	
18	若山喜一郎	岐阜市小熊町	東京都下 沢井局区御嶽	病気のお見舞い	昭和23-24	1948-1949	4月23日	
19	若山喜一郎	岐阜市小熊町	東京都沢井局御嶽	体調の心配と卓一対のお礼状	昭和23-24	1948-1949	6月23日	
20	若山喜一郎	—	—	刈田鶴	昭和24	1949	11月24日	
21	ワカヤマキ	ギフオグマチョウ	トウケウサワイ	お悔やみ(電報)	昭和25	1950	2月10日	
22	ワカヤマキ	ギフオグマチョウ	トウケウサワイ	お悔やみ(電報)	昭和25	1950	2月10日	
23	—	—	—	楊柳観音	—	—	—	
24	若山朗	岐阜市小熊町	西多摩郡三田村御嶽	お悔やみ	昭和25	1950	2月11日	
25	若山朗	岐阜市小熊町	西多摩郡三田村御嶽	座椅子と脇息のお礼状	昭和25以降	1950以降	2月14日	
26	若山朗	手交のため 住所記載なし	手交のため住所記載なし	鮎のお礼状	昭和25以降	1950以降	8月26日	
27	若山朗	岐阜市小熊町	西多摩郡三田村御嶽	毛織のお礼状	昭和26か28	1951か53	9月2日	
28	若山朗	岐阜市小熊町	西多摩郡三田村御嶽	命名書	昭和27	1952	8月20日	
29	—	—	—	飛躍	昭和27	1952	8月	
30	若山朗	岐阜市小熊町	西多摩郡三田村御嶽	湯葉のお礼状(川合玉堂執事より)	昭和28	1953	12月17日	

〈謝辞〉

本稿をまとめるにあたって、若山晴夫氏、若山綾子氏、吉安恵美氏にご協力をいただきました。長年保管してきた貴重な資料をご寄贈いただき、厚く御礼申し上げます。

資料整理に関して、北泉剛史学芸員（現・長野県立美術館）、翻刻に関して青山訓子学芸課長・守屋靖裕学芸員の協力を得ました。

〈インタビュー調査〉

左記の方々に次の日程で行った。特に朗と十歳違いの末の妹で、九二歳になる吉安氏には、確かな記憶をいきいきと語ってください、大きな力をいただいた。

・若山晴夫氏・若山綾子氏

令和3（2021）年4月15日、7月16日、11月13日、

令和4（2022）年10月25日、令和5（2023）

年4月13日、11月22日、令和6（2024）年7月30日

・吉安恵美氏

令和6（2024）年4月6日

・堀江知宏氏（画廊文錦堂五代目）

令和6（2024）年5月11日

主要参考文献

『歴史を築いた日本の巨匠Ⅱ 川合玉堂』美術年鑑社、1987年

『素顔の玉堂 川合玉堂と彼を支えた人々』岐阜県美術館、2013年

『美術商の百年―東京美術倶楽部百年史』東京美術倶楽部百年史編纂委員会、2006年

山本真紗子『唐物屋から美術商へ―京都における美術市場を中心に―』晃洋書房、2010年

青山訓子『平成二四年度岐阜県美術館研究紀要』

「資料紹介」杉山半次郎宛川合玉堂書簡について、2012年

寛真理子『岐阜市歴史博物館研究紀要第13号』  
「資料紹介」勅使河原直治郎関係資料について、1999年

高木敏彦『岐阜県歴史資料館報第26号』「川合玉堂の書簡と玉堂を支えた人々―紙商人武井宗祐と漢学者雄山瑞倫―」、2003年

「ぎふおもいで語り 画商が見た芸術家の素顔 川合玉堂 長江洞画廊・若山朗さん」岐阜新聞、1997年8月4日